小児看護 2月号　第46巻第2号（通巻第578号）　2023年2月15日発行（毎月1回15日発行）
ISSN 0386-6289

小児看護 2

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

Vol.46 No.2 FEBRUARY
2023

おなかが痛い，気持ちわるい
子どもの腹部疾患

連載

離島で釣りして，看護して
いつの間にか島にいた

学んで驚く！子どもの応急手当
評価があっての応急手当！

へるす出版

連載

心が歌えば、世界が揺れる

佐藤聡美 Sato Satomi
聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第21回 気づいていないのは誰？

私は今，疑われている。そして，自分だけが本当のことを知っている。しかも，沈黙は金なり。黙っているほど価値が出る。相手が幸せになる。皆さんにもそんな経験はないだろうか。思い返してほしい。

私は今，世界中の親と地球規模のプロジェクトに参加している。といっても，何も難しいことはない。国連の指示でもなく，国家予算が配分されているわけでもないが，自ら率先して参加している。もしかしたら，あなたやあなたの周りの人もすでに参加しており，皆さんがこの原稿を読んでいる頃には，無事にミッションは完了しているかもしれない。

この国際プロジェクトの一番厄介なところは，「なりすまし」である。疑われても知らぬ存ぜぬを貫き通さなければならない。巨大な守秘義務に覆われている。自分とはおおよそかけ離れた人物になりすまして事を成さねばならない。特に，子どもに悟られてはならないのだ。

意図的にそのふりをする。そういう行為があることに衝撃を受けたのは，小学校の国語の教科書で「泣いた赤鬼」を読んだときだった。赤鬼は人間と仲良くなりたくて，お茶を用意して，立札を立てて待っていた。待てど暮らせど，誰も来てくれない。挙句の果てに，「さては，だまして，とって食うつもりじゃないかな」と人間たちが話しているのが聞こえる始末だ。そこに青鬼が相談に乗ってくれた。青鬼は，自分が村で暴れるふりをするから，赤鬼が村人達を助けたら良いと提案する。しぶしぶその通りにすると，村人たちは赤鬼を恩人だと慕って，家に遊びにきてくれるようになった。けれども，青鬼はもう二度と赤鬼の前に姿を現すことはなかった。

小学生ながらに，この物語が切なすぎて，何とも言いようのない気持ちに駆られた。だが，今なら青鬼の気持ちがよくわかる。子どもが夢を叶えられるのであれば，私は喜んで青鬼にでもなろう。親が子どもを思う気持ちは，SDGsなどが目じゃないくらい容易く確実に実行される。

詰問が始まった。「ママ，まさかサンタの仕事を手伝っていないよね？」「どうしてそう思うの？」「だって，いつもぼくのほしいものばかりもらえるから」。

「『家の鍵を持っていて，ぼくのほしいものを知っていて，夜，家にいる』のはパパとママしかいないから」。

期せずして，親とは何ぞやという回答をさらっともらった気がした。

佐藤聡美
さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士，公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後，お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て，現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞（日本小児血液・がん学会賞）受賞。

©へるす出版